

『出雲国名所歌集二編』について

芦 田 耕 一

江戸時代末期に出雲の名所を詠んだ『出雲国名所歌集』が出雲大社の神官富永芳久によって編まれ、「初編」が嘉永四年（一八五二）の序跋、「二編」が同六年の序をもって相次いで刊行された。「初編」は紹介したことがあるが、「二編」については詳細な研究はなされておられないので、ここに名所、歌人、和歌を取り上げて簡単な説明を施していこう。

一

島根大学附属図書館所蔵の桑原文庫本によれば、縦一八・二糎、横一二・一糎の縹色の表紙である。「出雲国名所歌集二編全」の題簽が左肩に付される。『出雲国名所集』と合わさって一冊になっており、全体の墨付は五二丁、うち本集は三九、五丁を占めている。初めに『名所集』があり、次に本居豊穎と富永芳久による本集の序があり、続いて「出雲国名所歌集二編」として歌がはじまる。

豊穎の序は、

歌はいにしへの手ふりをならひさま／＼にをかききその世の心はえをさとり言霊の寿しく妙なる隅をもわかまへしるわさにてやかて学ひの道のたすけなれは学ひに心さゝむ人はかならずまつよみならふへきことなりかし富永芳久かおもひおこせるこの書も／＼とかの国の風土記の神世のことのあと古き名所とも多く残りてたふときをいかて世に広くしらしめむと思ふものからうひ学ひのともは多く耳遠くのみ思ひてあれはまつその国の名所のかの書に出たるをよめる哥ともをたにもつとへさらに人々にもよませてつき／＼世に出さはおのつからその名所の哥よみ出むとはかの本つ書をもよみわきまふへくやとてそちちなみに風土記に見えぬ名所をよめる哥ともをもともにつとへてかくはなりつるなりとそ哥はえらひとゝのへたるにもあらずたゝ名所の入たるは見きく

まに／＼つとへたるなればよしあしはいはすこの人もとより父か教子なるかとにかくに学ひの道にいたつくかおむかしくまたかゝるたくひの書ともやう／＼世に数多くなれるは学ひの道のあまねくみさかりになりゆくしにこそとよろこはしくもうれしくもうち思ふまゝになむ

本居豊頼

とあり、芳久の自序は、

故事学の世にみさかりになりゆくまゝに須佐男之命の八雲たつの御歌にはしめ給ひけむことの葉の道もあまねく大八嶋の外まであふきしぬふことゝそなれりけるあはれその雲の立いてけむこれの出雲国の神代のことのあとふるき名所とも誰かはしぬはさらむそれしぬふらむ遠きさかひの人々のためかつはまなひのたつきにもとつきて集めたる此歌書そなはいやつき／＼に同じ心にいにしへしぬはむことの葉もかもとこひのむものはみなもとの富永芳久

嘉永六年五月

である。

歌を上げ終ったあとに「出雲国名所歌集二編作者姓名」があり、「名はよみにかゝはらず音の頭字をもてわかつ

初編に出たるは名と苗字のみを出す」という方針のもと、名前の並べ方は本居宣長の「あめふれはあせきをこゆるみつわけてやすくもろひとおりたちうゑしむらなへそのいねよまほにさかえぬ」という四十七言歌に従う。「初編」に出た人名はたとえば「フ」の項でみれば「文清佐草」であり、初出の場合は「ハ」の項では「伴雄記普山 長沢衛門」というふう^記に在所が示されている。

次に「富永大人著述書目」として「書肆群玉堂」の既刻、未刻の十四点が上げられる。「群玉堂」は後出の「河内屋茂兵衛」の店名であり、「初編」以外にも『丁巳出雲国五十歌撰』『戊午出雲国五十歌撰』を版行している。そして、「同 三編編刻」として「此国の名所をよみ出給はん玉詠且御見聞の哥にても国所御姓名を御印被成左之書林へ送り被下候は、相達し次々編集出来のうへ上梓仕候」とある。これに従えば、「二編」は「初編」と同じように応募歌から選ばれたと思しいが、後述するようにそうでもないものもかなり多い。なお、「三編」は編まれなかつたようである。

このあとに、「発行書房」の「京都 恵美須屋市右衛門／江戸 山城屋佐兵衛／紀州若山 坂本屋大二郎／尾州名古屋 永楽屋東四郎／濃州大垣 茶屋源藏／奥州会

津若松 山形屋三右衛門／阿州徳島 天満屋武兵衛／播
州姫路 灰屋長兵衛／備前岡山 片上屋孫兵衛／芸州広
島 世並屋伊兵衛／雲州松江 尼崎屋喜三右工門／同杵
築 和泉屋助右衛門／肥前長崎 原田惣兵衛／肥後熊本
橋屋儀助／長州萩 山城屋彦八／大阪心齋橋筋博労町
角 河内屋茂兵衛」の一六書肆が上げられる。「初編」
と共通するのは「恵美須屋」「坂本屋」「和泉屋」「河内
屋」の四書肆にすぎない。

因みに、出雲の二書肆は嘉永三、四年成立の『近世名
所歌集』にも名を列ねている。

二

ここでは和歌の配列を述べよう。

総歌数は長歌五首を含めて一九四首である。「初編」
に做って、有賀長伯編『歌枕秋の寝覚』による並べ方に
従っている。まずは『秋の寝覚』では最後に置く宮や社
を初めにもつてき、次いで、山、峯、坂、路、玉、石、
関、森、原、田、橋、海、浦、浜、渦、島、埜、淵、湖、
滝、川、江、池、井、里、村、雑とあり、最後は「出雲
国」で締めくくっている。このうち、玉、石、雑は独自
のものであり、「初編」にも見られない。名所内の配列

は普通イロハ順であるが、「二編」は「初編」と同じく
前述の宣長の四十七言歌の順であり、宮や社で説明する
と、天日隅宮、葦原社、杵築社、御向社、湊社、三穗社、
須我宮、須佐社、熊野宮、玉鉾社、因佐社、神魂宮とい
うふうになっている。

三

「二編」に採り上げられる名所等は雑や出雲国を除い
て一二〇箇所である。多くは『出雲国風土記』に見られ
るのであるが、簡略に説明していききたい。『出雲国風土
記』（以下、『風土記』という）の本文は加藤義成『校註
出雲国風土記』の「訓注篇」により、また地名の比定に
についても大いに参考にした。

天日隅宮 『風土記』楯縫郡に「神魂命詔りたまひし
く、「吾が十足とたるあめのひすの天日栖宮の縦横の御量、千尋栲紐
持ちて……」とある「十足天日栖宮」は天つ日の
住む立派な宮殿をいうが、『日本書紀』神代下には
「汝が住むべき天日隅宮は、今供造りまつらむこと、
即ち千尋の栲紐を以て」とある。

葦原社 『風土記』楯縫郡に見え、今の平田市西郷町
にある。

杵築社 既出（「初編」に見えることをいう。以下同じ）。現在の出雲大社。

御向社 みむかひ 『風土記』出雲郡に見え、杵築大社の撰社の大神太后（須勢理比売命）神社。千家俊信撰『出

雲国式社考』（以下、『式社考』という）に「大社の玉垣の外瑞籬の内にあり今も御向社と称す」とある。

湊社 『風土記』出雲郡に見える「支豆支社」か。簸川郡大社町神門川口にあり櫛八玉の命を祀る。

三穗社 既出。現在の美保神社。

須我宮 「素我宮」として既出。現在の須賀神社。

須佐社 『風土記』飯石郡に見え、簸川郡佐田町宮内にある。『式社考』に「信比古（注、岩政信比古）云須佐之男命の社は出雲国内にも余国にも数多あれど真乃本ッ御社は此社にぞ有ける」とする。

熊野宮 既出。現在の熊野大社。

玉鉾社 これを詠む二一番（以下、歌番号は私に付す）の詞書に「出雲大神宮に詣ける時梅舍翁（注、千家俊信）のもとにまゐりけるに桜根大人（注、不明）をかこひの中に玉鉾社とてまつり給ふ」とある。

因佐社 『風土記』出雲郡に「伊奈佐乃社」、『式社考』に「杵築の内稲佐にあり」と見える。現在の大社町

稲佐浜にある。

神魂宮 「大庭宮」として既出。現在の松江市大庭町にある神魂神社。

次は「山」の二一箇所である。

朝日山 現在の松江市東長江町にある同名の山か。

船岡山 『風土記』大原郡に「阿波枳閉委奈佐比古命あはきへわなさひこのの曳き来て居多ましし船、即ち此の山是れなり。

故、船岡と云ふ」と見え、現在の大原郡大東町北村にある。

布自枳美山 『風土記』島根郡に「布自枳美高山ふじきみたけのやま…

…高さ二百七十丈、周り一十里なり。り。替あ」と見え、現在の松江市上東川津町の嵩山だけのこと。

小倉山 『風土記』島根郡に見え、松江市東持田町の大平山のこと。

琴引山 既出。現在の飯石郡頓原町にある。

鶴山 『はなのしつ枝』跋に「天の下にたくひなき出雲の大宮の西ひむかしにそひえたる鶴亀の二山にさ

きいてけむ言葉の花」とある鶴山か。神宮文庫蔵『出雲国名所集』に「鶴山 言大社西千家第後山」と見え、両者は同じであろう。

月山 既出であるが、必ずしも明確ではなかった。こ

れを詠む三九番の詞書「おのか遠祖重吉は尼子義久朝臣にしたかひて月山の城にさふらひしゆかりのありければその山に登りてよめる哥の中に」に拠れば、現在の能義郡広瀬町にある月山のこと。

鳥上山 既出。現在の仁多郡横田町にある船通山のこと。

鳶城山 これを詠む四一番の詞書に「遠祖のこもりける鳶か城山にのほりて古しのふをりしも夕立のふりければ」と見え、現在の出雲市東林木町にある鳶が巢城のあった旅伏山あたりをいうか。

大倉山 『風土記』鳥根郡に見え、現在の松江市本庄町北方の枕木山のこと。

多知久恵山 現在の出雲市乙立町の立久恵峽の山か。

宇迦山 既出。旅伏山から日御崎までの山なみをいう。

白鹿山 現在の松江市法吉町にある同名の山か。山頂の白鹿城は戦国期の山城。

牟志山 本集と合綴されている『出雲国名所集』（以下、『名所集』という）に見えるが、不明。

長江山 『風土記』意宇郡に見え、現在の能義郡伯太町南境の永江山のこと。

麻尔曾山 『名所集』に見えるが、不明。

馬見山 『風土記』烽に「馬見烽」と見える。これを詠む五二番の歌題は「烽火」とあり、現在の大社町の壺背山とされる。

枕木山 既出。現在の松江市本庄町北方。

星上山 現在の八束郡東出雲町に同名の山がある。

亀山 『はなのしつ枝』跋（既出。「鶴山」項）に見える亀山か。神宮文庫蔵『出雲国名所集』に「大社ノ東千家第宅後山」とあり、両者は同じであろう。「峯」は次の一箇所である。

鳥上峯 既出。鳥上山と同じであろう。

「坂」は次の三箇所である。

雲見坂 現在の平田市多久町にある大船山の西北方に雲見峠があり、このことか。

伊賦夜坂 『古事記』に見える（次項）。『田蓑の日記』

②文政元年（一八一八）八月八日条に「世人大庭と熊野との間にある。切通しといふ所を。伊賦屋坂といへれど。揖夜より切通しまでハ。二里あまり三里ばかりもあり。伊賦屋坂とあるからハ。揖夜の土地にこそあるべく思はるれ」と見える。『風土記』意宇郡の社名に「伊布夜社」がある。現在の八束郡東出雲町揖屋あたりである。

黄泉比良坂 『古事記』神代巻に「其の謂はゆる黄泉比良坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ」とある。

「路」は次の一箇所である。

出雲路 特定のものを目指すのではなからう。

次は異色の三つである。

御祈玉 これを詠む六四番に「神代より代々に出雲のみほき玉今のをつゝに見るかむかしさ」、詞書は「湯の山の青石に哥こひけるに」である。この歌が入る宣長の『鈴屋集』九に「出雲国意宇郡の湯の山の青石に歌こひけるによみてあたふ此石はいにしへかの国より玉につくりて奉りし石なり湯の山は式に意宇郡玉作湯神社とある山なり」と詞書にある。

猪像石 『名所集』に「シ、カタ」とルビを付す。これを詠む六七番の詞書に「猪犬石像のうた」とあり、『風土記』意宇郡に「猪^しを追ひし犬^{かた}の像……其の形石となりて、猪と犬とに異なることなし。今に至りても猶あり。故、宍道と云ふ」と見えるのをいうのであらう。

要石 これを詠む六八番の詞書に「国留にて」とあり、現在の平田市国富町であらう。『風土記』楯縫郡に「神名樋山……鬼の西に石神あり。高さ一丈、周

り一丈」とあり、これは大船山にある烏帽子岩をいうが、あるいはこれのことか。

次は「関」である。

手間関 既出。現在の能義郡伯太町にある。

戸江関 『風土記』島根郡に「伯耆の国郡の内なる夜見島と相向かはんとする間なり」と見え、中海に面する現在の八束郡美保関町森山あたりであらう。

次は「森」である。

出雲森 既出であるが、不明。

保乃加森 既出。現在の出雲市所原町の富能加神社の森か、能義郡伯太町の同名の森をいうか不明。

佐々布森 現在の八束郡宍道町佐々布にある森であらう。

「原」は一箇所である。

園松原 『風土記』神門郡に「水海（注、現在の神西湖を含み、そのあたりにあった湖）と大海（注、日本海）との間に山あり。……今俗人、号けて園松山と云ふ」と見える。現在の出雲市西園にある園の長浜である。

「田」は次の一箇所である。
杵築田 特定のものを目指すのではなからう。

「橋」も一箇所である。

祓橋 特定のものを指すのではなからう。

「海」は三箇所である。

杵築海 これを詠む七九番に「杵築海秋にしなれば釣

すとして這田黒田のうらなれにけり」と見え、「這田」

は現在の大社町にある「這田浜」をいうと思われる

ので、これは特に大社町あたりの日本海を指すので

あろう。

飫宇海 既出。中海又は宍道湖であらう。

出雲海 これを詠む八二番の詞書に「出雲大神宮にま

うてける時伯耆国二部峠といふを越えけるにこゝに

てはしめて海のみゆるをとへは出雲の海なりといふ

に」とあり、二部峠から見えるというのであれば中

海か。

次は「浦」である。

三種浦 「初編」に「三種関」と見え、そのあたりで

あろう。現在の八束郡美保関町。

久毛等浦 『風土記』島根郡に見え、現在の美保関町

雲津浦である。

意宇浦 「飫宇浦」として既出（八束郡東出雲町意東

付近の中海とした）であるが、これを詠む八七番に

「風きはふ布自奈の山やしくるらんおうのうら波た
ちざわくなり」と見え、「布自奈の山」は現在の八

束郡玉湯町布志名あたりの山かと思われるので、「意

宇浦」は宍道湖であらう。

恵曇浦 『名所集』に見えない。『風土記』秋鹿郡に

「恵曇浜」とあり、現在の八束郡鹿島町あたりの日

本海をいうか。

袖師浦 既出。中海から宍道湖一帯の浦であらう。

出雲浦 既出。島根半島西端の海岸あたりかとしてお

いたが、島根県立図書館蔵『出雲名寄大概』に「自

大社一鳥居八町許西」とある。これによれば、稲佐

浜であらう。

錦浦 既出。現在の安来市赤江町付近の中海、あるいは

八束郡島根町加賀あたりをいう。

佐太浦 『出雲名寄大概』に「秋鹿郡俗浜佐陀ト云所

古ハ潮水今ハ湖水也」とあり、現在の松江市西浜佐

陀町あたりの宍道湖北岸である。

佐須美浦 『名所集』にも見えず、不明。

「浜」は八箇所上がる。

葦浦浜 『風土記』島根郡に見え、現在の八束郡美保

関町笠浦である。

二俣浜 『風土記』出雲郡に見え、現在の大社町日御碕にある。

御埼浜 『風土記』出雲郡に「御前浜」と見え、これのことか。日御碕神社の社前の浜をいう。

高浜 明確ではない。『島根県の地名』によれば、海辺ではないが、出雲大社の殺生禁断の領域として「巽者高浜」とあり、今地名は残っていないが、現在の大社町浜山公園の南部に比定されている。

玉結浜 『名所集』に「タマユヒ」とルビを付す。『風土記』島根郡に見え、現在の美保関町玉江浦のこと。千酌浜 既出。現在の美保関町千酌にある。

園長浜 既出。現在の出雲市長浜海岸のこと。五十狭々之小浜 既出。『式社考』に「今の杵築の地を五十狭々之小浜とも……いひしなり」とある。「瀉」は一箇所である。

出雲瀉 既出。前出「出雲浦」と同じか。「島」は一三箇所上がる。

船嶋 『風土記』島根郡に見え、現在の美保関町片島西北方にある。

衣島 既出。現在の美保関町菅浦湾内の島。子嶋 『風土記』意宇郡に見え、現在の安来市の中海

にある島かとされている。ただし、これを詠む一番に「昔誰おふしたてゝか出雲瀉子島と名にはよひはしめけん」とあって子嶋と出雲瀉が関係するように詠まれているので、出雲瀉が神門郡であり、子嶋が意宇郡というのはいかにも不審である。

鶴島 既出。現在の八束郡島根町沖泊港北方の島。

附嶋 『風土記』島根郡に見え、現在の島根町野井北方の築島のこと。

櫛嶋 『風土記』島根郡に見え、現在の八束郡島根町加賀の桂島東方にある。

黒島 『風土記』島根郡に見え、美保関町七類湾西方若松鼻北方の大黒島。

姫嶋 『風土記』島根郡に「比売島」として見え、現在の美保関町法田湾にある松島北方の市目島のこと。

砥神島 『風土記』意宇郡に見え、現在の安来市安来一町の十神山のこと。

豊嶋 『名所集』にも見えない。これを詠む一二一番の詞書に「いなさの浦にせうえうして」とあり、現在の大社町稻佐浜にある島か。

稻積島 『風土記』島根郡に見え、現在の美保関町北

浦の稻積湾内の真島のこと。

蚊嶋 『風土記』意宇郡に「野代の海の中に蚊島あり」と見え、宍道湖にある嫁ヶ島のこと。

亀島 『風土記』島根郡に見え、現在の美保関町笠浦北方のサザエ島のこと。

次は「埜」である。

三穂埜 既出。現在の美保関町の島根半島東端の地藏埜のこと。これを詠む一二八番の詞書に「京より帰りける時伯耆国二部埜といふ所にてやすらひけるに北のかた海のおもてうらくとなきて隠岐国三穂埜などとはるく」と見たさる」とある。

粟江埜 『風土記』島根郡に見え、現在の美保関町森山の横田神社南方の岡鼻であろう。

毘売埜 『風土記』意宇郡に見え、現在の安来市姫崎町付近。

佐雑埜 『風土記』意宇郡に「出雲郡の堺なる佐雑埜」と見え、現在の八束郡宍道町の佐々布と伊志見との境の出鼻のこと。

勝間埜 『風土記』島根郡に見え、現在の美保関町片江湾西方の埜。

加賀神埜 既出。現在の島根町加賀の潜戸鼻のこと。

「淵」は次の一箇所である。

止屋淵 『名所集』に「ヤムヤノ」とルビを付す。『風土記』神門郡に「塩冶郷……塩冶毗古能命坐しき。

故、止屋と云ふ」とあり、『日本書紀』崇神天皇に「止屋の淵に多に姜生ひたり」と見える。「塩冶郷」は今の出雲市大津町塩冶町あたりをいうが、止屋淵

はどのあたりか明確ではない。

「湖」は次の一箇所である。

宍道湖 松江市にある。

「滝」も次の一箇所である。

松笠滝 『名所集』に見えるが、不明。現在の飯石郡掛合町松笠にある竜頭が滝をいうか。

「川」は次の一箇所である。

貴船川 『名所集』に見えるが、不明。

来待川 『風土記』意宇郡に見え、現在の八束郡宍道町を流れる。

山国川 『風土記』意宇郡に見え、現在の安来市等を流れる吉田川のこと。

肥川 既出。斐伊川であろう。

富田川 『名所集』に「トダ」とルビを付す。これを詠む一四五番に「久かたの月山おろし音さえて富田

の川水薄水せり」とあり、「月山」からして現在の安来市等流れる飯梨川の下流の呼び名であろう。

大鳥川 『風土記』島根郡に見え、現在の松江市本庄町を流れる無名の小川である。

宇迦川 『風土記』楯縫郡に見え、現在の平田市を流れる宇賀川のこと。

宍道川 『風土記』意宇郡に見え、現在の八東郡宍道町を流れる佐々布川のこと。

野代川 『風土記』意宇郡に見え、現在の松江市乃木町を流れる野白川のこと。

出雲川 既出。斐伊川であろう。

桜川 『名所集』に見えるが、不明。

「江」は「松江」の一箇所であり、省略する。

「池」は次の三箇所である。

張田池 『風土記』島根郡に見え、現在の松江市生馬町半田池のこと。

津間抜池 『名所集』に「ツマヌキノ」とルビを付す。『風土記』意宇郡に見え、現在の松江市浜乃木町字ツバにあつたと伝えられている。

佐久羅池 既出。現在の八東郡鹿島町佐陀本郷の北西にあつた池。

「井」は次の二箇所である。

出雲井 『名所集』に見えるが、不明。

真名井 既出。松江市の真名井社の近くであろうとしていたが、神宮文庫蔵『出雲国名所集』に「北島第宅東亀山麓」とあり、出雲大社の所である。

「里」は一〇箇所である。

阿用里 『風土記』大原郡に「古老の伝へに云へらく、昔、或る人、此の処の山田を佃りて守りき。爾の時、目一つの鬼来て、佃人の男を食へり。爾の時、男の父母、竹原の中に隠りて居りき。時に竹の葉動げり

……」と見え、これを詠む一六七番も「里竹」として「夕風に竹の葉そよくあよの里昔をしのふふしとなりけり」と竹に因む。現在の大原郡大東町西阿用、上下久野を含む地区をいう。

拜志里 『名所集』に「ハヤシノ」とルビを付す。『風土記』意宇郡に見え、現在の八東郡玉湯町、宍道町を含む地区をいう。

杵築里 既出。現在の大社町付近をいう。

安来里 既出。現在の安来市安来町、島田町付近をいう。

山口里 『風土記』島根郡に見え、現在の松江市西川

にあつた池。

津町付近をいう。

口宇迦里 『名所集』に「宇賀里」ならば見え、『風土記』出雲郡に「宇賀郷」がある。現在、平田市に口宇賀町が存する。

広瀬里 『名所集』にも見えない。これを詠む一七七番に「勝日山」(現在の月山)があるので、現在の能義郡広瀬町をいう。

大草里 『名所集』に「大^{オホクサ}艸里」と見える。現在の松江市佐草町、大草町付近をいう。

白瀉里 『名所集』にも見えない。これを詠む一七九番に「雪の降ける日松江にありて」の詞書で「かきくらし大橋かけて降雪につよく軒端もしらかたの里」とあり、現在の松江市白瀉本町付近をいうか。

法吉里 『風土記』島根郡に見え、現在の松江市法吉町、春日町付近をいう。

山田村 『風土記』意宇郡に「来待川……西に流れて山田村に至り」と見え、これを詠む一八一番に「旅人の来待を過て足引の山田の村に花をみるかな」とある。現在の八束郡宍道町菅原である。

このあと「雑」が一〇首あるが、特定の地名を詠み込むものがないので省略に従う。そして最後は「出雲国」

三首が上がる。

四

次に歌人たちを紹介しよう。いずれも近世の人である。「初編」に見られた人もかなりいるので、これらは「既出」として簡単に述べる。初出の歌人については、『和学者総覧』のほか、『名家伝記資料集成』、『出雲国名所歌集二編作者姓名』、『鯁玉集作者姓名名録』、『鴨川集姓名名録』、『近世名所歌集姓名名録』、『はなのしつ枝作者姓名名録』により適宜取り上げる。本居宣長、小沢普庵、加藤千陰、香川景樹、賀茂真淵、加納諸平ら著名な人物は省略に従う。なお、ゴチック体は『和学者総覧』に見られないことを示す。

まず、「宮」「社」から一七人を上げよう。

出雲俊信宿禰 既出。千家。出雲国造。宣長の鈴屋派を出雲に導き入れる。

出雲尊澄宿禰 既出。千家。出雲国造。宣長、俊信を師とする。

出雲脩孝宿禰 姓は北島。全孝男。出雲国造。国造尊孫宿禰 既出。千家。俊信を師とする。

鈴木高綱 周防国防府。松崎天満宮副官。足代弘訓を

師とする。

足羽美生 出雲国松江。松江藩士。嶋重老、森為泰ら
を師とする。

赤塚澄景 出雲国杵築。出雲大社上官。尊孫、尊澄ら
を師とする。

富永芳久 既出。出雲大社神官。

田村清年 周防国佐賀神主。通称安芸。出雲介と称す。

石塚龍麿 遠江国敷智郡細田。万葉仮名の研究で著名。

宜長、内山真龍を師とする。

高橋中行 松江藩。重老、尊孫を師とする。

森直里 駿河国府中。本居春庭を師とする。

衣川長秋 既出。鳥取藩国学教授。春庭を師とする。

松井佳敷 杵築。商人。尊澄を師とする。

森為泰 既出。松江藩皇学館歌学訓導。中村守臣、尊

孫を師とする。

小栗広伴 遠江国浜名郡石原。龍麿、本居大平を師と

する。龍麿の家集『楨舎歌集』を編する。

枝木茂久 松江藩士。重老、芳久を師とする。

次に「山」の歌人は二人を上げる。

細木良郷 出雲国楯縫郡口宇迦。農民。尊澄、芳久を

師とする。

寺田大貫 松江。重老、芳久を師とする。

小泉真種 既出。松江家士。俊信を師とする。

水谷龜彦 松江藩士。鎮正軒。俊信を師とする。

横山永福 松江藩士。尊孫を師とする。

市岡猛彦 既出。尾張藩士。宜長、春庭を師とする。

堀延年 播磨国楫西郡日飼。姫路在住。

金築春久 楯縫郡国富社司。重老、守臣を師とし、後

に鈴木腋に学ぶ。

坪内昌成 出雲大社禰宜。俊信を師とする。三九番に

よれば、昌成の遠祖坪内重吉は尼子義久の家臣であ

った。

神宗定 豊前国築城郡赤幡八幡社司。

坪内忠臣 昌成男。大社教中講義。尊孫を師とする。

外山正樹 松江藩士。尊孫、守臣を師とする。

小川保梨 『鴨川集』に「小川保隣」がいる。『名家

伝記資料集成』は「保隣」で上げて「松江藩」とし、

また「保梨」も上げて「保隣と同人力」とする。

本居内遠 既出。紀伊藩士。大平養子。

竹並諸樹 出雲大社禰宜。尊澄を師とする。

大瀧光賢 出羽国田川郡大山町。酒造業。四九番の詞

書に「鈴木重胤四十賀に寄国祝」とあり、重胤を師

とする。

山田頼臣 周防国都濃郡戸田。鈴木直通を師とする。

『和学者総覧』は「靱臣」として上げる。

吉見吉雄 松江藩士。重老を師とする。

原田年彦 周防国矢地。『和学者総覧』に「周防都濃

郡。徳山藩に仕」と見える原田年実と関係があるた
ろう。

幡垣鳥雲 松江阿羅和井神社神官。文化年間の人。澄

月、慈延を師とする。

北嶋善子君 出雲国造全孝の北の方。

「峯」は一人を上げる。

佐伯敬信 周防国防府。右田神社祠官。足代弘訓、城

戸千楯を師とする。

「坂」は二人を上げる。

千家之正 既出。出雲大社上官。俊信を師とする。

平岡雅足 出雲大社上官。尊孫、重老を師とする。

「石」は三人を上げる。

土岐国彦 松江藩士。重老、芳久を師とする。

岡部東平 生国は筑前国大宰府。福岡藩士。後、江戸

に在住。青柳種信を師とする。

藤江千元 松江藩士。重老を師とする。

「関」は二人を上げる。

吉田芳章 出雲国能義郡切川。神職。

児玉篤恭 松江藩士。重老、芳久を師とする。

「森」は三人を上げる。

佐草文清 既出。出雲大社上官。内遠等を師とする。

五十君夷守 周防国佐波郡三田尻。鈴木高鞆を師とす
る。

岩政信比古 既出。周防国玖珂郡。俊信を師とする。

俊信 『出雲国式社考』の校訂者。

「浦」は十二人を上げる。

中言林 出雲大社上官。尊孫を師とする。

井山公敬 松江藩士。重老、守臣、芳久を師とする。

黒沢中清 本は江戸の人。後、出雲在住。

野間朗衡 松江藩士。重老を師とする。

西村久浮 既出。紀伊国日前宮祝官。

長沢伴雄 紀伊国和歌山。紀伊藩士。大平、春庭を師
とする。

石橋道基 楯縫郡平田。酒造家。重老を師とする。

土肥惟孝 周防国佐波郡右田。

堀尾光久 既出。京都。『近世名所歌集』の撰者。

嶋重老 出雲大社上官。櫛廼舎と号す。俊信の高弟。

渡部顕孝 周防国右田神社司。

小林歌城 江戸。幕府旗本の臣。村田春海、宣長を師とする。

「浜」は七人を上げる。

高浜貞方 既出。出雲大社社中。俊信を師とする。

田中清年 既出。杵築の人。『名所集』序の板下筆者。

出雲昌孝宿禰 既出。国造北島從孝三男。

今村季唯 松江藩士。尊孫を師とする。

稲葉幸年 既出。和歌山。大平を師とする。

新庄正方 『出雲国名所歌集二編作者姓名』は「新居」とし「阿波田宮」とする。『和学者総覧』も「新居」

で上げる。田宮村神明社司。大麻比古神社禰宜。内

遠を師とする。

後藤夷臣 既出。安芸国山県郡。大平を師とする。

「渦」は一人だけである。

手銭さの子 出雲大社禰宜列手銭白三郎妻。『丁巳出

雲国五十歌撰』の跋の作者。

「島」は五人を上げる。

佐々木玆護 周防国徳山藩士。

鈴木定秋 周防国宮市。松崎天満宮神主。

三好秀興 既出。伯耆国米子。

平井厚信 松江藩士。尊孫を師とする。

富永尹久 芳久男。

「埜」は二人を上げる。

竹矢信昌 既出。能義郡。富田八幡宮神主。俊信、諸

平を師とする。

出川道年 出雲国八束郡来待。出川兵太郎。

「川」は六人を上げる。

出雲内孝宿禰 北島。全孝二男。内遠を師とする。

西田惟恆 和歌山。医家。大平、内遠を師とする。

諏訪宣麿 陸奥国会津。阿波守と称す。諏訪社神主。

高橋定久 楯縫郡口宇迦。宇賀明神神主。一四七番の

詞書によれば、細木良郷と親しい。重老を師とする。

鈴木直臣 周防国防府。高柄男。太政官出仕。萩原広

道を師とする。

国造全孝宿禰 北島。出雲国造。天日隅宮御杖代。

「江」は二人を上げる。

増田年長 松江。為泰、尊孫、重老を師とする。

萩原広道 岡山藩士。大国隆正を師とする。『源氏物

語評釈』の著者。

「井」も二人を上げる。

渡部敬満 周防国佐波郡右田。周防一宮玉祖神社禰宜。

大社教権大講義。

井原篤之 松江藩士。重老、芳久を師とする。

「里」は六人を上げる。

出雲勝孝宿禰 北島。重孝男。

島重胤 既出。重老男。出雲大社禰宜。

佐草美清 既出。出雲大社上官。内遠、平田篤胤を師とする。

とする。

佐伯淳俊 周防国佐波郡右田。既出の佐伯敬信（淳信）

と関係があろう。

本居豊頼 既出。内遠男。紀伊藩国学所教授。

笹股幸満 能義郡広瀬家士。吉田芳章を師とする。

最後に「雑」は三人を上げる。

内山真龍 既出。遠江国豊田郡。庄屋。真淵を師とする。

る。『出雲日記』の作者。

竹村尚規 遠江国敷智郡入野。酒造業。真龍、宣長等を師とする。

を師とする。

鈴木直通 周防国防府。松崎天満宮祠官。高鞆父。

以上、簡単に歌人を紹介してきたが、「初編」と同じく地元歌人が最も多数を占めている。特に、俊信の門弟が多く見られることから、これは「初編」を襲って宣長

の鈴屋派を中心に行っていると見えよう。そして、彼らの他の詠歌が『鴨川集』、『近世名所歌集』、『丁巳出雲国五十歌撰』、『戊午出雲国五十歌撰』などに入っており、本集は著名な歌人の詠を多く採った歌集だと断じてよいであろう。出雲歌壇の層の厚さを窺いうる好個の資料となりうる。

他国の歌人については、周防国は鈴木高鞆、同定秋、同直臣、同直通、佐伯敬信、同淳俊、渡部敬満、同顕孝、岩政信比古、土肥惟孝、五十君夷守、佐々木玆護、山田鞆臣、原田年彦、田村清年を数えるが、これは岩政の影響が大きいためであろう。和歌山は「初編」と同じく本居内遠、長沢伴雄、西村久浮、稲葉幸年、西田惟恆が見られ、内遠の養父大平の関係によるだろう。そして、遠江国は石塚龍麿、竹村尚規、小栗広伴、内山真龍、真淵がおり、これは真淵の影響と思しい。

五

最後に、本集に入っている歌について、いくつか注意すべきものがあるので説明していきたい。

「杵築社」の「遠江より思ふとちおもひおこして詣ける時によめる」とある石塚龍麿の、

はる／＼ときつきの神の大前にぬき奉るけふそたふと
き

と同じ時の詠と思われる龍曆詠が本集に四首見出され
る。

まず、「熊野宮」の「大前にまうて」とある、

くしみけ□神の命のたふとくもしつまりいます三熊野
の宮

「玉鉾社」の「出雲大神宮に詣ける時梅舎翁のもとに
まゐりけるに桜根大人をかこひの中に玉鉾社とてまつり
給ふそのかたへにおのつから桜おひてはしめて花の咲た
るそれを題にて」として同行したと思しい小栗広伴と一
緒に、

桜根の神のみたまのちかひにて花もけふこそ盛なるら
め

と詠んでいる。

「因佐社」の「御社に詣てをろかみ奉りて」とある、

二柱神のみことのももりけん神代のまゝかこれの小浜
は

最後は「雑」の「出雲大神宮にまうてける時学のはら
からなる梅舎翁のもとにて」と見える、

年まねく出雲八重垣かきたえてあひみぬ君にあふかう

れしき
である。

衣川長秋の「三穂社」の「御社に詣て」とある、

いにしへのそのあとどころごとく／＼に今もをつゝに三
穂の神垣

と同じ時に詠まれたと思われるものが「初編」に同じ詞
書で見られる。

小沢芦庵の「須我宮」の「本居宣長古事記伝の竟宴に
須佐之男神を」とある、

わけまよふ八雲の道のしるへせよ祈るも久しすさの男
の神

は彼の『六帖詠草』（一八一一年刊）雑上に「須蓋鳥」
として入る。

「琴引山」の「名所山」を詠む市岡猛彦の、
神代よりしらへかはしてかよふらし琴引山のみねの松

風

は『名所今歌集』（一八一七年刊）下に入る。

同じ「琴引山」の「春祝」を詠む加藤千蔭の、
ひとしほの色そふ松の春風も千代をしらふる琴引の山

は彼の『うけらが花初編』（一八〇二年刊）巻一に「但
馬の国出石しり給へる君の大とじ君のもとにて、春祝言

を」の詞書で、

ひとしほの色そふ松の春風も千よをしらぶる琴ひきの
浜

とあり、「琴引山」ではない。

「宇迦山」の「梅舎に物して帰りなんとしける時」と
ある衣川長秋の、

まれにあひてかたるまもなく故郷にわかるゝことの宇
迦の山本

は『田蓑の日記』八月六日条に同じように見える。

同じ「宇迦山」の「宇迦里の細木良郷か妻むかへたる
よろこひに」とある本居内遠の、

千代までとうからつとへてうたふらん宇迦の山本やま
もとゝろに

と同じ折に詠まれたものが二首見える。

「口宇迦里」の「良郷か妻むかへたるに」とする本居
豊穎の、

むつましく鶴こそ空によはふなれこや万代の口宇迦の
さと

と同じ里の「おなしをり」とある嶋重老の、

妹とせのちきりもしるし人毎に千代ととなふる口宇迦
の里

である。

「出雲山」の「富永保久百年忌に冬懐旧」とある山田
頼臣の、

百歳の昔をおもひ出雲山時雨の外にぬるゝ袖かな

と同じ折に詠まれたと思しいものに次の四首がある。

「袖師浦」の「保久の追慕に冬懐旧」とある土肥惟孝
の、

幾度かぬるゝ袖師の浦千鳥ふみ見し跡をみるにつけて
も

「衣島」の「保久百年忌に冬懐旧」とある佐々木玠護
の、

古をおもひ出雲の衣島しくれにぬるゝ時は来にけり
「来待川」の「保久の追慕に冬懐旧」とある西田惟恆

の、
過し世はかへらぬものを友千鳥いく夜来待の川になく
らん

最後に、「出雲川」の「保久の追悼に冬懐旧」とある
鈴木直臣の、

出雲川昔なからに鳴千鳥いつもむかしをこひてなくら
ん

がある。

「黄泉比良坂」の「をさなき子をうしなひける時」とある香川景樹の、

追しきて取かへすへき物ならばよもつひら坂道はなくとも

は彼の『桂園一枝』（一八三〇年刊）花に同じように見える。

「御祈玉」の「湯の山の青石に哥こひけるに」とある本居宣長の、

神代より代々に出雲のみほき玉今のをづくに見るかむかしさ

は「御祈玉」項に述べたような詞書で『鈴屋集』九（一八〇三年刊）に入っている。

「飲宇海」の「島重老六十賀に」とある加納諸平の、
 おうの海の其川千とり千世とほき八千世とほきてけふ
 もかもまとゐすらしもことほかひさかほかひして今も
 かもうたけすらしも玉松のはしき島山ゆきめくる月日
 もしらにうたけすらしも

は彼の『柿園詠草』（一八五四年刊）二に同じように見える。

「意宇浦」の「清水高平か国へ帰るわかれの会にその国の名所を題にてよみける時」とある西村久浮の、

出雲瀉おうのうら波をりかへしよせこんほとをまちやわたらん

は『近世名所歌集』初編（一八五一年刊）に入っている。「袖師浦」の「海辺霞」を詠む長沢伴雄の、

ふりはへて桜貝とるあまの子か袖師の浦は霞けるかな
 は『近世名所歌集』初編に入る。

「千鈞浜」の「浜」を詠む稻葉辛年の、
 思ふとちほたりとりもち豊御酒をいてやちくみの浜つたひせん

は『近世名所歌集』初編に入る。

「松江」の「名所立春」を詠む増田年長の、
 立かへる千年の春にさきにけり松江のうらの浪の初花
 は『出雲国三十六歌仙』（一八五六年刊）に見える。

「安来里」の「出雲大神宮に詣て帰りける時安来といふ所にやとりて」とある衣川長秋の、

人皆もわれもつゝます旅衣安来の里にたちかへり来ぬ
 は『田蓑の日記』八月八日条に「酉時ばかり安来にいたりぬ。此所より米子までさかしき山路三里なれば。船にのらんとするに。空のけしき夜船こぎゆかんは。あやふしとて。こゝにやどりぬ」としてこの歌が詠まれている。

「広瀬里」の「里立春」を詠む笹股幸満の、

勝日山いつる日影を待とりて広瀬の里に春は来にけり
は『類題和歌鴨川集』四郎集（一八五二年刊）に入る。

「雑」の「京に有ける頃俊信宿禰の国へかへらるゝに」
とある宣長の、

君をわか都へたつる国の名の八重垣つらきけふのわか
れ路

は『鈴屋集』八に「京にて千家清主の国にかへるにわか
れをしみて」として入る。

同じく「出雲国造神寿詞後積のしりへに」とある宣長
の、

大前に今も申してまをしたへ綾に尊きこれの吉詞を

は「寛政四年壬子詠草」に「出雲国造神寿後積をかきて
しりよみてかきそへたる歌」として入っている。

同じく「内山真龍か出雲大神宮に詣たる道の日記を見
てそのはしに書つけける」とある宣長の長歌（長いので
省略）は『鈴屋集』五（一七九九年刊）に入る。

以上、本集は前述したように応募の歌を採っているこ
とは当然であろうが、これ以外に旧作の既に版行されて
いたものからも選入している事実が明らかになった。

注(1) 拙考「『出雲国名所歌集初編』について」（『島大

国文』第二十七号 平十一・三）

(2) 本文は石破洋氏「衣川長秋『田籥の日記』―翻

刻と研究―」（『島根県立女子短期大学』『島根

国語国文』第七号 平八・十二）による。